

# 高松 梧峰 和上の御示談

## 目 次

01 親の喚び声	20 魔界と外道
02 年回の意義	21 信者と悪業
03 迷信と正信	22 称名報恩
04 聞法の心得	23 信一念の覚知
05 善悪に就て	24 善悪共に
06 お助けが先	25 宿善と獲信
07 念仏と信心	26 求道の心
08 釈迦の教え	27 聖教は仏の直説
09 法報応の三身	28 前世の決定業
10 名号の独用	29 無生の生とは
11 報恩の相承	30 真諦と世俗
12 信徳と機相	31 信行は不二
13 絵像木像に就て	32 必ず遇える
14 浄土での再会	33 心が往く
15 弥陀ヲタノメ	34 千中無一
16 五善と五悪	35 信心と歡喜
17 三途見光	36 念仏往生の願
18 たのみにする	37 一念と多念
19 自力疑心と自我	編輯後記

## 01 親の喚び声

【問】 私は片田舎の娘でございます。小さい時から今までお聞かせに預りましたけれど、私にはどうしても解りません。聞けば聞くほどやたらに聞いたことを力にするようになります。かえって聞くことがあだとなるようにも思えます、ただ自分がよくよく考えるとき、やはり私は信じよう安心しようと思っているのでもございましょう。自分ながら自分の心が分りません。私にはいくら聞いたってだめでございましょうか、如何にしたら戴かれるのでもございましょうか、お願いいたします。真に私には進むべき道が分りません。

魂の不滅、地獄、極楽、御仏様。これが私にはあるともないともはっきり致しません。分らなければいくら御安心の話を聞いてもだめでしょいか。道理や理屈で徹底出来ないものでしょうか、お願いいたします。

【答】 おたずねの赴きはよくわかりました。信の得られぬ間には、斯

様な悩が誰人にもあるものであります。併しながら、斯様に悩むばかりでは何の所詮もありませぬ。初めて田舎から京都にお参りした人が道に迷うて宿を忘れました。そこで、こう行けば帰れるか、ああ行けば帰れるかと、非常に悩んで居りましたところが、その人は自分の宿の前を行きつ戻りつして、思案して居りましたのです、そこへ、宿の主婦がお客の悩みはどこへやらとれて安心したとこのことでありまして、今あなたのお悩みが丁度その通りで、お慈悲の御本願の前に行きつ戻りつ、悩んでお六字の親様がここじゃここじゃと声をかけて下さると同じころで、あなたを親様がよんで、お前の後生をそのまながら助けるのである、請合うのであると、よんで下さるのでもあります。このおよび声に心を留めて御聴聞なされたれば、何の悩みもなく御安心が出来るわけでありまして。

## 02 年 回 の 意 義

【問】 某寺にて或信徒よりの尋ねに、死亡者に法事弔いを営み供養すれば、地獄へ落ちたものに少しは責苦がゆるめらるるものなりやの問に對し、其お答に死亡者が極楽に往生したら多少効果があるが、地獄に落ちたものには更に効果はないとの事でありました。

然るに先月或る所で某和上の説教に、死亡者に対し法事弔いは大切にせねばならぬ。七日七日の忌日、四十九日、一周忌等大切に供養せば御経の効果がある。現世にて犯罪者を警察に捕縛し取調べの上裁判所に廻し、未決囚として獄に入れ、判事の言渡し決定するまで日数がかかるよに、地獄へ落ちる罪人でも、閻魔の廳の取調べを受け罪科決定して地獄に落ちるので、其間永い間迷うているから、大切に法事弔いせよとの事でありました。尤も地獄に落ちるまで空に迷うて居る間の事とも思われますが、何れにしても斯の如き説教を聞く事は初耳の様に思われます。同じ真宗でありながら、教えの違うのは如何の義でありますか、また、極楽へ往生したら多少供養の効果があるとの事でありましたが、不審であります。極楽に往生したら弥陀同躰とも聞きますのに、甚だ疑問であります。近く私は両親の五十回忌を営み度と思っておりますが御誦経は如何なる効果が有るのでしょうか、併せて御明示下さる様お願い申し上げます。

【答】 何れも間違っている点があるように思われます。或はお聞き間違いかも知れませんが、おたずねに任せてお答え申します。

極楽に往生した者はすでに弥陀同體のお証りを開かせて頂くのでありますから、娑婆の誦経はただ如来様の御恩を報ずる外はない筈であります。又地獄に落ちた者は更に利益がないと云うことは勿論ありません。然れ共追善供養という事は自分の追善の力を直に亡者に送ることであるから、これは真宗の法義ではあります。真宗では先ず第一に自ら獲信

して仏恩報謝のために、御読経すれば如来様がそれをお受取になりて、亡者は勿論、他の衆生にもその功德をお届け下されます。そこで功德は莫大になります。よって先ず我身の往生の一大事を御決定になって、仏恩報謝の為に法事弔いをなさることが肝要であります。又次のお話も、地獄の道中のことも、仏説にないこともありませぬが、これは尤も軽い地獄のことで、我等如き極悪の罪人は、かかる道中にはありません。今生を終るなり直に墮獄するのであります。何れにせよ、真宗には年回法要も信心のなき人は、これを御縁に信心決定せられ、又信心のあるなしを問わず、仏の御恩を受けぬものはありませぬから、何分とも仏恩報謝の心得にて、如来様へお供え申す者にて年回法要なさいることが御正意の法義であります。

### 03 迷信と正信

【問】 迷信とは如何なるものをいうのでありますか。

【答】 迷信とは、仏教の言葉で申しますと戒禁取見というのに当ります。これは原因にならぬ事をつかまえて、原因になる如く考えるのであります。また同じ原因であっても、邪になる。早く申せば悪魔の喜ぶような事が迷信であります。又、悟りの開ける道で無いものを悟りの開ける道と考えるのも迷信であります。仏がこれを一口に戒禁取見と申されました。要するに原因で無いものを原因と思い、又悟りの道で無いものを悟りの道と思い、又、神さまのお蔭とおもうて人にだまされる事が世の中にある。かくの如き、道理に外れることを仏教では迷信というのであります。

【問】 原因の無い事を、あるように思うのが迷信でありますと、鬼門とか金神とか申してその方角に当るのを悪いと致しますのは迷信でありますか。

【答】 迷信であります。

【問】 今日友びきであるから、葬式が出されぬと申します、又四十九日が三月ごしになりてはいけないと申します。あれらは迷信でありますか。

【答】 やはり迷信であります。元未友引とは、はや其言葉が違います。あれは中国の言葉で、友引と申します。それは勝負事のことです。其日に葬式を出せば一緒に死ぬなどということは無い事なのであります。その友引を日本人が友びきと読みかえて、原因にならぬ事を原因になる如く恐れるので、迷信であります。又四十九日にしても、三月をこしては禍であるとは、全然道理の無い事です。こういう事を恐れたり

祭ったりする、すべて迷信であります。

**【問】** 稲荷を念じて病気を治して下さい、福を与えて下さいとこちらから願います。その願いがかなうものでありましようか。

**【答】** 全体稲荷とは、誰方を信じたものか、それからが問題であります。御大師様は弘法大師の事でよく分っているが、稲荷とは何か、私はあれは神代の神様と考える。近來の人は稲荷の狐を祭って、そのきつねを稲荷の如く考える。神代の神様ならば、これを敬うのはよいのであるが、何もこの神様に禍をはらうてやろう、福を与えてやろう、祈って来いというお誓いはありません。それにこれを祈るのは迷信であります。又、その正体が狐なら、これは問題であります。いやしくも万物の靈長たる人間が、かかる狐などに頼ことになりますと、狐などは通力があるとの昔からの伝説がありますから、物を知ることが無いとも限りませぬが、然し、世間で稲荷のお告という中には人間わぎが多いようであります。まず、頼みにきた人に、いろいろと話をさせておいて、その間には問わすがたりに色々な事を話す。その肝心な処を覚えておく、話した方は沢山に話した事じゃから、自分のいうた事を忘れてしまふ。そして最後に「あなたはこれでは無いか」と前に聞いた事をとりませて云う、こちららは、自分が覚えぬ事知らず話した事を忘れて、よく当る神様じゃと喜ぶ。まず、こんな程度でありましよう。稲荷のお告の中にも人間業のだましものが多い事を心得ねばなりません。かくの如く狐よりはまだ、だましものが多いのであります。また、たとえ狐の業力をもって知らせてもらうのでも、それは一寸便利なようであるが、しかし、かかる動物などに迷うのは邪に迷うことになるから、永久間には必ず禍いを受ける事になります。由て、悪魔・鬼神を祭る事を如来様は非常にお戒めになりました。こういうものから、よし多少の利益を受ける事がありましても、それにとらえられていると、向うが迷いだから、こちらも自然に害を受ける事になります。

弘法大師の如きは菩薩さまであります。あながちに争えぬ事があります。しかし仏、菩薩にせよ、我々の今生の御利益を得たいとお祈りすることは、この仏、菩薩の御本意で無いことを心得ねばなりません。仏、菩薩だけでなく、阿弥陀さまにも現世を祈るなどあります。これは雑修であります。この事に迷うと外ではない、未来永々劫の大事を過る事になります。この度は三界六道の迷いをのがれて、極楽へまいらせてもらう大仕事があるのであります。人間境界の、僅かの事に迷わぬようにしなくてはなりません。

## 04 聞法の心得

**【問】** ある講演を聞きました、御開山の信仰と今日吾々の信仰とは違っている。御開山は御信仰に入られるまで、二十年の叡山の御修行をな

さった。今日の人はいそれだけの準備無くして、結果ばかり御開山と同じ  
よくなる急いでいる、だから御開山と同じ信仰は得られない。当  
流の真実信心を得んとするならば、第一に自分が実感せねばならぬ、祖  
師は叡山にて二十年の御修行により真実信心を決定された。由て我々も  
ただ聞いただけではいけない、実感しなくてはならぬ。——こう申すの  
であります。これに就てお伺いたいのには、御開山の二十年は他力信心  
をいただくための御苦勞であったのでしょうか、お願い致します。

【答】 御開山が叡山で学問なされ、御修行なされた御苦勞は、あれは  
まだ浄土真宗に入られぬ前の事でありませぬ。あの二十年の間は、あなた  
がこの末世の衆生を助ける法は何であろうか、と色々とお尋ね下された。  
その間があの二十年であります。あなたがちに真宗の信仰をあなただが得ら  
れるための準備のためにはありませぬ。あらゆる聖教を研究して、これ  
が末世の衆生の助かる道か、あれが末代の凡夫の救われる法かと尋ねて  
下される間あります。然し、あなたは浄土から出て来られた権化のお  
方である故に、その事は御自身にはよく分っているのであるが、末代の  
私らに、この親鸞は叡山で、あれを尋ね、これを尋ねたが、あらゆる法  
が末代の凡夫の救われることに間にあわぬぞと、その事を御自身の身に  
かけての御教化なのであります。ただ、末代のものは外に何も助かる道  
は無いぞと、口で云うただけでは疑うから、御自身で実地にかけて、や  
って見て下されて、この通り外の法は何れも我々の助かる道は無い、駄  
目であるから迷うなど、身体の上の御教化なのであります、祖師の御苦  
勞は御信心の得られるための御準備ではありませぬ。

【問】 世間でいう人があります、信仰は概念ではいけない、実感でな  
くてはならぬ。それであるから、まずわが機を充分に見つめて、あさま  
しい自分の機を見つめきる処に信仰は出来る、こう申しますが如何で  
しょうか。

【答】 これも心得よう一つでは必要でありませぬが、しかし、心得  
かたが悪いと大変なあやまりになります。心得かたは要するに、蓮如上  
人の仰せに、後生は大事じゃ、無常の境界じゃ、罪惡の凡夫じゃ、未  
来は恐ろしい、あの御教化をしみじみ我身に受ける事と思えば無駄  
ではありませぬ。これが無いと驚きが立ちませぬ。従ってありがたい御  
教化を軽うに聞く事になります。わが身に引き受けて聞かされませぬ。  
罪が深い今三惡道に沈む、未来は恐ろしい、一大事じゃ——この事を考  
える事は必要なことでもあります。これが我が心に無くては御教化が  
軽うになります。しかし、ただ、自分の手許を穿鑿して、自分を見つめ  
さえすれば、それで信仰が得られ、助かるように思うと大なる間違い  
であります。自分を見つめるのみなれば、それはただ罪のあさましさに  
いよいよ泣くばかりであります。ただ自分の機を眺めて、見つめさえ  
すればそれで何もかも解決がつくのでは決してありません。ただ見  
つめるのみでは、いよいよわが身のあさましさが知れて、泣くばかり  
であります。浄土真宗の安心は、それは後生大事と気がついたならば、  
大悲の如来様

の私を救うぞというて下さるおん喚声を、聞き分けさせてもらうばかりであります。後生大事と気づいたら、往生大悲のおや様の御本願をよくききわけさせてもらう事が真宗の肝要であります。

## 05 善 悪 に 就 て

【問】 自己をほんとうに見つめて、それから深く味うて行く方が早くわかるように思いますが、如何でしょうか。

【答】 御開山が申されます。善を知ったというても、如来様の知ってられるほどに知らねば、ほんとに知ったとはいわれぬ。悪を心得たと申しても、如来様の御存知ほど心得なくては、ほんとうに心得たと申されぬ。我らは事実、善が何とも、悪が何ともわからないのであります。真実に悪という事が分れば、もう三悪道に落ちる事が恐ろしゅうて、寝ても起きても居られない筈であります。然るに寝たり起きたり食べたなり平気でやっているのは、わが罪悪を見たのやら見ぬのやら何やら分らぬ事でありませぬ。真実にわが罪が分って見れば、三品の懺悔があるべき筈であります。我々は罪を見つめても涙一つこぼれませぬ。熱い汗一つ出ませぬ。そんなことで何うして自分の罪を見つめたと云えませぬ。後生は一大事、お浄土へ参らせてもらわねばならぬと、斯う大事の思いさえかかれば、もうそれでよい。それから先は私の力でない、私の骨折りでない、ただお浄土の親様のお喚声をきくのであります、それをきけばかかるものが、このま、御慈悲に救われることと心びろくに安心の日暮しをすることができます。真宗の肝要は如来様のお喚声を聞かせていただく一つであります。

## 06 お 助 け が 先

【問】 阿弥陀様の御本願は、この私をこのままに御助け下さるのであると聞かせていただいて、それを嘘とは思いません。然し、それなら、今私は死んでもいよいよ間違いは無いかと、こうわが胸に手を置いて考えると、そこに何うも落付かぬものがあります。

【答】 如来様のお助けを間違いないと聞かせてもろっている。それがまことに結構な事でありませぬ。如来様の仰せがまことにならぬばかりに今日まで迷うてきたのであるが、今日は因縁めでどう御縁に会って、如来様の仰せが嘘と思われぬようになった。これほど結構な事はありません。

然し、法然上人の御教化の中に「うそとは思われぬと同行がいうが半分

ではないか」とのお心持ちをおのべなされた仰せがあります。如来様の仰せを皆までほんまにせねば、ほんまに聞いたのではありませぬ。薬師如来の仰せも嘘はない。大日如来の仰せも嘘は無い。嘘は無いが、この罪業の私を助けるというお約束が無いから、私の後生頼みにはなりません。あの阿弥陀如来の仰せもほんまじゃが、それをこの薬師如来や大日如来と同じように考えるから、仰せが半分になります。嘘とは思わぬが、それなら何が嘘でないのか、この十悪五逆の悪人女人をこのままお助け下さる事に嘘が無いのである。そこが大日如来や薬師如来に無いところなのであります。そこで、阿弥陀様の仰せをほんまにするとは、十悪五逆の悪人をただでお助け下さるといふ、そこまでをほんまにきかせてもらわねば、阿弥陀様の仰せをまるきりほんまにした事になりませぬ。如来様の仰せをほんまにきくとは、あの如来様が私を助け下さる事までをほんまにきくのであります。そこが真宗安心の肝要であります。

**【問】** 有りがとう御座います。如来様の方はそれでよく分らせていただきました、ところで、私の心に、それならこれでよいかと念を押すと、どうもはつきりせぬ所があります。これで長年困って居りますが、何ういうわけでありましょうか。

**【答】** 何事によらず、思いもそめぬ意外の事をつかまえて、これがこれがと心配して、肝心の事を忘れてしまいうていっているような事が境界にもあります。これは注意しなければなりません。

御法義に入るのに、極楽へいよいよ参れるわいと先に認めをつけて、それから安心しようとかかかるとあります。それで、寺で御法話を聞いて居る間は有難い。わが家へ帰るとまた三毒煩惱がおこるにつれて、これではどうも参れそうにないと後もどりする、わが心で、極楽へまいれそうになる事を尋ね出そうとする。これは凡夫でありながら、わが根性から見出されぬものを見出して安心をしようとするので、出来ぬ相談であります。

私はいよいよ今死んでも極楽へ行けるわいと、隣りへ行くように明かになつて、それで安心しようと思う、これは無理な事があります。わが胸を眺めても、わが行いを眺めても極楽へまいれそんな事は無い。それを眺めて安心しようとするのは間違いであります。

御当流は往生が先で無い。おや様の願力のお助けの方が先である。参られそうにないのを心にかけるのでない、行かれそうに無い、まいられそうに無い、仕様の無いこの凡夫じゃが、この度は往生大悲の親様が、その凡夫を正客として、気づかうなよ、案じるなよ、この弥陀が請合うて助けるとの御勅命であるから、往生の一大事は、親様のお慈悲一つをたよりにおまかせするのである。それから先は、遣ろう遣らじは称陀の安心はからい、私としてはただただおや様の、願力のお手丈夫をたよりに安心させてもらうばかりであります。

しかし、大事な事でありませぬから御注意致しますが、こう申しますと、それなら極楽へ参れるやら、参れぬやらそれも分らぬというわけではあ

りませぬ。これは私として、私の智慧で、目途を立て、参れるとなるのではないが、阿弥陀様が助けるというて下さるから、この阿弥陀様の仰せがただかかれると、さよくなればかかるあさましきものが、おかげさまで参らせていただくことよと夜が明けるのである。あなたの仰せを信じさせてもらうて見れば、参れようか、参れまいかでない、私としては何にも分りませんが、しかし、あなたが参らせてやろうと仰せ下さる事ゆえ、間違いのない参らせていただく事よとそこに安心するのである。要は「助けるぞよ」の仰せをさきにいただくのである。私の胸に参れるか参れぬかを先にきめてかかるのではないのであります。

## 07 念仏と信心

【問】 法然上人は日に何万べんの念仏をおとなえになりました。それを御開山がお伝えなされたのであるから、そこで我々も法然上人を模倣して日に何万辺の念仏を称えて、清浄な日暮しをし、そしてお浄土へまいらせていただくのでありますまいか。信ずるとか信ぜぬとか言う事はむずかしいから、ただ念仏するような事にして、参れる事であってほしいと思います、如何でしょうか。

【答】 大無量寿経の法門と、観無量寿経の法門と法門に変わりはありませんが、お扱いが二つになっております。法然上人の御在世は難行苦行をせられる大徳が居られた、それで悟りが開かれるかなければ、なかなか未来に明りが立たぬ。そこで観経の相對門の御法門をもって、念仏せよ往生が出来ると、念仏往生ということばをもって、他力往生をお示しになったのであります。三大阿僧祇劫修行せねばならぬのに、ただ称えただけで往生とは、なるほどこれは私のはたらきでない。ただ、願力のはたらきと受けとれたのであります。しかしそれを誤って、それなら「称えばまいれる」と称えることに力をいれるように考えた人があった、これは間違いでありました。そこで法然上人はたとえ日に何万べん、お念仏を称えなされても、その称えられるありだけが、仏恩報謝の外は無かったのであります。

然しただ今のように誤るものが出てまいりましたので、御開山は大無量寿経によつて、涅槃の真因はただ信心である。ただ南無阿弥陀仏のおかげを信じさせてもらえばかりで、お浄土へまいれるのじゃ、その証拠には法然上人のお言葉にこうあると、正信偈の中にそれを引いて、生死の家に戻来することは、決するに疑情を以て所止とす、速に寂靜無為の樂に入る事は、必ず信心をもって能入とすと申されました。三界六道に迷うことは弥陀の本願を疑うからである、浄土へは信心一つで参られるのである。称えるものは参られるが、称えぬものは参れぬとは申されませぬ、信ずるものは参れる疑うものはまいれぬと、法然上人も言っているではないかと御開山は仰せられました。疑うものは迷うぞよ、信ずるものは参れるぞよとの御教化であります。これを蓮如上人は御文章



にとなえただばかりでは参れない、信心が必要であると仰せられたのであります。そこで御文章の御教化にそむくものは御開山の御教化にそむく事になり、御開山の御教化にそむくものは法然上人の御教化にそむく事になり、法然上人の御教化にそむくものは弥陀の本願にそむく事になるのであります。そこでどこまでも相承の御教化をあやまらぬように聞かせてもらわねばなりません。

【問】 そうしますと信じたらばお念仏は称えずとも参れるのでありましようか。

【答】 お念仏がお浄土参りに用があるか無いかのお尋ねなら、それはお浄土まいりには用事はないのであります。それでは称えずともよいかなどのお尋ねなら、それは称えずでなりましようか、極樂にまいる因になるなら称えるが、お礼にだけなら称えないというような、浅間しい考えを持ってはなりません。御礼御報謝なら猶さら心がけて称えさせて貰わねばなりません、広大な仏の御恩がわかれば、明けても暮れても称えられるだけ称えさせて貰いましょう。御文章の上では一通一通に、この上の称名は仏恩報謝とあります。不用なことを御文章に書かれるわけはありません。数をとってまで称えることはない、数をとると念仏の上に腰をすえることになる、数は仏が知ろしめすなり、何万べん称えたやら、それは私は知らぬ、御報謝のお称名に数をかぞえることはいらぬ。お立向いの親様が上の方から数はかぞえていて下さる。私は数には用事はない、立っても坐っても、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏ととなえさせて貰うばかりであります。

## 08 釈迦の教え

【問】 或人の問に、地獄の世界や極樂の世界は誰も見たものはないのですが、実際あるものでしょうか又は勧善懲悪のために言うたものでありましようか、如何でしょう。

【答】 人間の経験に関らぬものは信ぜられぬという人がありますが、是は西洋人ばかりではなく東洋の中にもあります。彼等の言うのには神や天国の如き空をつかむような事は信ぜられぬ、総て何事によらず経験によらねばならぬと申して居ります。日本人の中にも、盲目的の信仰はいけぬ、わが心にがてんせねばならぬと申す人があります。所謂何でも経験せねば信ぜぬという人々であります。このような人々は無量永劫経ても、極樂まいりの決心はできぬと思います、目で見耳で聞くことも大抵きまったものであります。研究すれば世界のことは皆わかるというが、それも多くの人の研究を信ずるからであります。世界全般の人々の研究を信ずるからであります。地獄・極樂は行って見る人がない、それは吾人が行ったり来たりは出来ぬ所なのであります。即ち人間では

往復の出来ぬところでもありますから、そこで釈尊や多くの聖者方が出て教えて下さるのであります。就中釈迦如来は、我見是利故説此言といわれて、極樂浄土のことはよく見た上で説ききかせるのであると、仰せになりました、故に之を信ずることはまことに道理にかなったことでもあります。

【問】 私は信心が戴けているかどうか判りませんが、しかしお寺参りをしますから地獄へは行かぬと思いますが如何でしょうか。

【答】 罪惡がなければ地獄には落ちません、罪がある己上は一寸お寺へのぞいた位では罪は消えませんが、罪があれば地獄は免がれぬのであります、又浄土へは少々の善根では参れませぬから、そこで大善大功德の南無阿弥陀仏を戴き、弥陀願力におすがりして参らせていただくのであります、だから名号を頂くことが肝要であります。

## 09 法報応の三身

【問】 御和讃の末尾及び末燈紗の自然法爾章に、無上仏のことが出ております。ここにある法身・報身・応身に就て御教示をお雁いします。

【答】 先ずこの三身とは仏様の証りのことで、第一の法身とは真如の理とて、一大宇宙に遍満せる大真理を仏がみがいとお証りになった、其の智慧とこの真如が一致したところを法身のお証りというのであります。そこでこの法身は一大宇宙に遍満して、色もなく形もましまさずと申すのであります。第二の報身とは、仏の因位の願行に報い顕われた仏身に於て、即ち上の法身が相形をあらわして、浄土にましますを報身仏と申すのであります。第二の応身というものは、この報身仏がお釈迦様の如く穢土に顕われてあらゆる衆生に拜まれるように、衆生に応じて生れ出て下されたるを応身仏と申すのであります。されば末燈紗に無上仏と出して、「形もましまさぬようを知らせんとて」と無上仏と申すように仰せられてありますが、これは即ち先きの法身仏のことであって阿弥陀さまはこの法身をお証りなされた。それで私ら凡夫も浄土に参ればこのお証りを開かせて頂くのであります。然るに近來これを誤って、阿弥陀様は全く色も形もなき仏で、吾々も死して浄土に往生すると全く空になってしまうのじゃ、決して極樂とか仏様とか色形のあるものになるのではないという人がありますが、大変な誤りであります。元より法身仏のお証りからいえば、其辺もあるのであります、そればかりではありません、報土もあり報身もあり、色形のある極樂もあり、阿弥陀様も存在ましまして、私らもこの浄土に詣らせて頂くのであります。すべて何事でも唯一辺に片寄ると大変な誤解になりますから、御注意なされねばなりません。

## 10 名号の独用

【問】 私はいつも御教化に預っているのですが、今度の後生については、おや様のお助けに預るということは、疑いを持ちませぬ、然し、いよいよ今死ぬると取りつめて考えると、何うも先が暗いように御座います、これは何うしたわけで御座いでしょうか、お示しを願います。

【答】 金は何に用事があるのかと申しますと、それは物を買うために用事があると申す外はありませぬ。然るに、金は沢山もっていても、ちゃんと棚の上に上げておいて、物もよう食べずに、飢じい飢じいと云うていては何にもなりませぬ。家が無いなら家を建てるための金じゃから、家を建てねば所詮はありませぬ。食べ物がないなら食べものを買わねば、金のあり甲斐はありませぬ。入用な時に使わなかったならば、何万円のお金がありましても、何にもならぬことになります。南無阿弥陀仏のおいわれを聞かせていただき、阿弥陀様のお慈悲を貰うた、貰うたといって、そのお慈悲を棚の上にあげておいてはつまらぬ事があります。南無阿弥陀仏の御利益は、此世に於てもありますが、僅かな今生の利益を目途に貰うた南無阿弥陀仏でない。今死んで行く後生の一大事に、この南無阿弥陀仏は役立って下さるのであります。この南無阿弥陀仏こそ、私を今お浄土へつれてゆく品物であると、後生を思うにつけても南無阿弥陀仏をとり出して、南無阿弥陀仏を使うて喜ばせて貰うべきであります。心細うても、死に向うても、いよいよ死ぬるとなればこの南無阿弥陀仏に連れられて、お浄土へまいらせて貰うのであります。故にこの南無阿弥陀仏をあてたように、心丈夫に暮される事が肝要であります。

## 11 報恩の相承

【問】 私は親や先祖の墓へまいりましても、南無阿弥陀仏と申して拝みます。ところがこの南無阿弥陀仏は、仏様のみ名であると承ります。然しだまって墓を拜んでも何か物足りませぬ故に、南無阿弥陀仏と称えて拜むのであります、これは如何でありますか。

【答】 南無阿弥陀仏と申すことは、阿弥陀様のお名前であります。それで仏前にまいって、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏とお礼することは、これはあたりまえの事ではありますが、それならといって七高僧の御前へ参っても、南無阿弥陀仏と称えます。善知識の御前へ参っても南無阿弥陀仏と称えます。これが真宗のお礼の姿であります。それならその心持ちは何ういうわけであるか、それは御開山や七高僧へ御礼するも、この広大な南無阿弥陀仏をいただいたのも外ではない。あなた方の御相承のためであると、その御礼の心持ちで南無阿弥陀仏と称えるのであります。

又墓へまいりまして、死んだ人が阿弥陀様ではないが、先祖代々のおた、かげで今日自分がこうして、広大なおいわれをきかせて、貫う身になつた、そのお礼のためにやはり南無阿弥陀仏と称える。心持ちはちがいますが、真宗は結局どこへ行っても南無阿弥陀仏であります。子供の墓へまいりまして、それを御縁として南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と行住坐臥、時処諸縁をえらばず、何につけても親様の御恩を思う心から南無阿弥陀仏と称えるのであります。

## 12 信徳と機相

【問】 阿弥陀如来様は、我々衆生に成り代って大願大行を成就されたこの阿弥陀様を信ずる一つで、その大願大行が私のものになるというかから、私の極楽往生は間違いないという事であります。そう致しますと信一念の時に、阿弥陀様の大願大行が私のものになる故に、此もらった願行によって、信ずると同時に悟りが開けねばならぬと思ひます、然し死なねば悟ることの出来ないのは、どういうわけで御座いませうか。また、阿弥陀仏の御本願を信ずれば、不可称不可説不可思議の功德によつて、過去未来現在の罪が一時に消えてしまふと聞きます、さすれば悪の報いを受ける心配なく極楽往生間違いないといわれます。そう致しますと信後の人、過去現在の罪は消滅して居りますから、信後には前世の因縁によりて苦しむ事なく幸福ばかりでなくてはなりません。それに信後に於て何も変る事なく不幸も遠慮なく来ます、このところは一寸矛盾して居るように思ひますが何卒御教化をお願いいたします。

【答】 お尋ねの如く信の一念に南無阿弥陀仏の主になるとも仰せられます。阿弥陀仏の大願大行をこの六字に撰めて御回下さるのであります。さりながらこれは往生法とて、浄土に往生して同時に仏になる因種を戴くのであります。よつて此界では正定聚の位または等正覚の菩薩の位に定まると仰せられてありますが、この界で仏になるのではありません。それは此界現在ではまだ前生の業因によつて、凡夫の肉体を受けているのでありますから、身も凡夫、心も煩悩にまつわられて信前も信後も変りません。されば正定聚というも等正覚の菩薩というも、信心の徳から仰せられたもので、現在に光明放つような菩薩の姿があらわれるのではありません。しかし乍ら既に往生して成仏する因種を頂いたのでありますから、未来必ず西方浄土に往生して、尊きお悟りを開くことは疑いありません。

また次のお尋ねの如く、これも信心の当体三世の業障一時に罪消えるのと仰せられてありますが、これも信心の徳から仰せられたもので、信心の徳からいけば間違いなく、三世の罪は消滅して居る道理でありますから、未来は必ず浄土に往生させて頂くのであります。しかし乍らすがたの上では、尚凡夫の身をかかえているのでありますから、その徳が一分あらわれる事もあり、顕われぬ事もあります。それは罪の軽重にもより、業の熟すると熟せぬともよつて相違があるのであります。故にその罪

重く業の熟せる分は、凡夫の肉体を具えている間は、因果の道理で余儀ない事でありませぬ。しかし乍ら転重軽受ということもあって、其罪の消える分により、現在に御利益を豪ることは勿論であります。これが即ち浄土真宗の現世の御利益であります。

真宗には現世の祈りは固く誠めてありますが、現世の御利益が絶対に無いということではありません。この事は御開山さまの浄土和讃の終りをお読みになれば明かなことでもあります。信心のお徳の面では三世の罪が滅し乍ら、なお此界に逗留の間は種々の悪報が現れる事は、たとえば生花のようなもので、まだ前業所感の肉体のある中は、生花の根は切られながら、葉も枯れず花も咲くようなことでもあります。即ちその根が切られてあれば、花は咲いても実は結ばぬ如く、今生逗留の間は悪い不幸もある訳であります。即ち悪業煩惱の根が切られて居るのだから、更に未来の悪報を招くことなく、浄土の往生を遂ぐる事は疑いありません。

### 13 絵像木像に就て

【問】 先日ある御方から承った話ですが、絵像や木像は勿論仏檀も拝む必要はないと言われました。その絵像や木像は一の方便でしょうか、唯一つ六字の名号を信じ尊べばよいと思いますが、それとすれば仏前には線香もたかず、お花も御仏飯も供える必要も無い訳になりますが、如何でしょうか。

【答】 近頃専らお尋ねのような事を主張する人がありますが、大変な間違いであります。段々聞きただして行くと、仏は自分の心の中に存在するもので、西方に極楽があったり、阿弥陀仏が居たりするような事は無い、六字の名号こそ自分の胸の中の仏の御名であると主張し、唯六字名号は尊いものだから、これを拝みもし称えもするのである、絵像や木像は方便であり想像仏に過ぎないという、しかしこれは大きな誤りでありませぬ、決して左様なことではありません。現在御経巻の上に西方浄土の阿弥陀様のお姿をお写しして、お礼をする事は明にお説きになっているのであります。絵像木像は元より此界の紙や木で造ったものには違いありませんが、生身の如来様のお心が此中にお宿りなされるものと心得て礼拝するのであります。これを除けたり捨てたりすることは、勿体ないことでもあります。強くいえば五逆罪の一つにもなるのであります。御絵像様のお裏に方便法身の尊号形とありますが、この方便は権仮の方便ではありません、善巧方便と申して、衆生済度の巧な如来様というこゝとで曇鸞大師が方便法身と仰せられてあります。由て方便と申しても意味が一通りでありませぬから、まぎれぬよう心得ねばなりません。

### 14 浄土での再会

【問】 私は最近可愛い一人の娘を急病で亡くしました。可愛らしく極くまめで太っておりましたに、急に亡くなりましたので、日夜愁嘆して居ります。和上様あの子はどこへ行ったのでしょうか、水の泡のように消えて亡くなったのでしょうか、あまり業も作って居りますまいから、極楽へも地獄へも行ってはおらないと思います。私が慕うて忘れぬ如くあの子も私を慕うて居るでしょう、お寺様に七日七日に参って頂き、色々御法話を聞きますが、安心出来ません。読経して頂くをあの子は聞いて居るのでしょうか、また親子と名乗って会うことが出来ますか、行先のこと、また追弔仏事の御利益を明了に御教示下さいませお願い申し上げます。

【答】 親として幼き子供を亡くした程悲しい事はありません。御同情いたします。然し人間は死して肉体は此世で焼きもし埋めもしますが、心は決して亡くなるものではありません。それと同時に子供なればとて、此世では罪を造る暇も多分はないわけなれど、前生の業の持越という事がありますから、強ちに地獄に墮ちぬとも云われませぬ。なお追善供養の事もあります、元より御読経の御利益という事もない訳ではありませんが、浄土真宗ではこれよりも、もっと大きな御利益のあることに心附かせて貰わねばなりません。

それは第一に生存している親達が御信心をお戴きなさることであり、この御信心が頂かれてあれば、今度御自身が浄土に往生なされたら自由に済度出来ます。又これより外には再び我子に顔をあわせる方法はありません。尚又年回法要をして読経をさせて頂く事も、信の上から営ませて頂けば仏恩報謝の外はありません。自力の廻向を捨て、仏恩報謝と心得て年回法要を営ませて頂けば、阿彌陀様は其功德をお受取になつて、因縁ある衆生へ親様からお与え下さることになりますから、其功德は莫大なものであります。斯様な訳でありますから、何はおいても御自身浄土の往生が肝要であります。何卒何卒お聴聞になって、御信心を御決定になることをあくまでもお勧め申し上げます。

## 15 彌陀ヲタノメ

【問】 御文の中に、何処にも阿彌陀仏の御勅命に、「後生をたすけたまへと彌陀をたのめ、必ず救うべし」とありますが、私は何故か考えれば考えるほど「後生たすけたまへ」の意味が分らなくなります。何卒御回答願います。

【答】 後生たすけたまへと彌陀をたのめと、仰せらるることは、先ず「たのむ」とは、「たのみにすること」であります。漢字になおせば、「頼」の字のころにて、元來願ひ求めることではありません。世間では人に物を願ひ求むるときに、頼むの言葉を使いますが、これは時代の言葉の変化から来るので、あなたを頼りにしますから、何卒お世話をし

て下されと、いう意味で使用することから、近代に至りて誤ったもの  
あります。手紙にも御依頼の文字を用いますが、依頼といえば、よりた  
のむ、よりすがるという意味の外はありません。漢字の上からも、和語  
の上からも、元来は願うの意味には使われぬ事で、それが自然に変化し  
て願うことに使用するようになったのであります。

御文章一帖一通にも「かねて頼みおきつる妻子も財宝も、わが身に  
はひとつもあいそうことあるべからず」と仰せられて、次の御文に「た  
のむべきは弥陀如来」とあります。これは臨終を引寄せて考えて見れば、  
平生たのみに思いし妻子や財宝が、何一つたよりにならず、ただ親様ば  
かりがたよりになるというおこころであります。

そこで後生たすけたまえとは、親さまが先手をかけて、助け救うと喚  
んで下さる故、仰せのままにおまかせすることを申したものであります。

蓮如様の御在世には、あのお言葉が一般に能く通用したものでありま  
すが、時代の言葉の変化で願うことに聞えるようになったのであります。  
このお味いをよく頂けば、真宗の御安心のお言葉も沢山にありますが、  
このお言葉が一番よく御安心のお味いとれるのであります。お互いに  
臨終を引き寄せて考えて見れば、天にも地にも頼りになるものはひとつ  
もありません。ただ親様ばかりが頼りではありませんか。この意味に於  
て御当流の御安心をよくよくお聞きわけなさることが肝要であります。

## 16 五善と五悪

【問】 大経下巻の五悪段の終りのところに「人能く中に於て、心を一  
にし意を制し身を端くし〜泥洹の道を獲ん」とありますが、私はどうし  
てもこんな事はできないのですが、あれは自力の修行のことでありまし  
ょうか、それとも信心獲得すれば、自然とそうしたことには仏力としてな  
されるという信徳の事でしょうか、又次に「身独り度脱して其福德、度  
世上天泥洹の道を獲ん」とは、先きに示されたような行いをすれば、後  
生は天上界に生れるということでしょうか、ごくごく平易にお示しを  
願います。

【答】 この五善五悪の御文は、他力の信心のことも含んでおりますが、  
元来これは仏教全体に亘って善因果、悪因果の道理をお示しなされ  
たもので、要するに勧善懲悪を主としたものであります。されば真宗には  
とっては、俗諦門をお示しなされたものであります。依て造悪の結果は、  
悪道に沈む、善行の結果は天上に生まるとあっても信心を頂いた上には、  
悪道にも天上にも行くことはありませぬ。浄土に往生させ頂くことは  
決定であります。これ即ち願力不思議の因果法で普通の因果法を超越さ  
せて下さるからであります。さればこれを強ち必ずと、勧め給うたので  
なく、ただあたりまえの因果の道理をお示しなされて、悪き行動を改め  
て善き行いをせよとお勧めなされたものであります。御文に泥洹の道と  
あるのは、これは仏のお証りのことで、上に申した他力信心の結果をお

挙げなされたものであります。さればゆめゆめ自力の修行をせよということではありません。

## 17 三途見光

【問】 突飛な事をお願いして甚だ相済みませんが、実はこの事が大変気になって一日も早く御教示を頂きたいので御座います。先日の御示談に、不幸の母よりの質問に對しての御解答に、亡くなった子供に読経の御利益ということも無い訳ではないが、それよりは生存している親達が、信心を頂きさえすれば、自分が浄土へ往生して、自由に済度が出来ることとでありました。それは分るのですが、ここに不審なのは、子供が地獄へ落ちていたのを、神通方便を以て直ぐ浄土へ参らせてやる事が出来るでしょうか、私の不審はそんな、てっとり早い訳には行かない事ではあるまいかと思われまます。何となれば地獄へ落ちるものは、罪惡深重無智愚鈍のもので、照育の光明がなかなか行き渡らないで、大慈悲に目覚めることが人間界のそれよりも、遅いことと思ひます。故に親達が浄土へ参ってからそれを助けようとするよりも、阿弥陀様がそれよりか遠く昔より、絶えず御心配になつて居るので御座いますから、親達が極樂へ参ってそれから子供を救うということをお待ちする要なく、これは如来様独りばたらきにお任せした方がましでありますまいか。

かく考えますと忌日を御縁に御法義を喜ばせて貰つて信を得た人は益々御恩を喜び、得られない人は、ますます調熟の度を増して頂くということに考へて、法事を営むことが肝要ではありますまいか、此点につき詳しく御教示をお願いします。

【答】 今のお尋ねに三つのころがあります。一には還相回向について、三惡道から直に浄土につれてかえられるか否かのお尋ねであります。これは分解脱、全解脱ということがあつて、全解脱とは三惡道で直ぐ信心を得させて、浄土へつれてかえることとあります。しかしこれは余程宿善の厚い人で、たまには無いこととありませぬが、何としても三惡道の者のことなれば、か様なことはめつたに無いこととあります。さりながら分解脱の御利益は、必ずなけねばなりません。分解脱とは三惡道より一度人間界に生れさせて、それより信心を得させて浄土につれてかえることとあります。この分は必ず出来ねばならぬ御利益であります。

二つに、衆生済度は阿弥陀様の独り用きにまかせた方がましでありますかとのお尋ねであります。いかさまお他力の御本願は、一から十まで親様のお仕事に相違はありませぬ。還相回向の御利益というも、全く如来様より頂いた大慈悲の用きでありますから、本より我等衆生の持前の用きではありませぬ。併しながら、すべての衆生を御済度下さることは、勿論親様の独り用きであります。この広大な御教を伝える上には、その人人の因縁の深い者からお伝えするところが有効なのであります。それは現在人間世界にあつても、親兄弟や或は親しき友達から



法を教えることが、便利など同じことでもあります。これとても我が力です。人を助けるのではありませぬ。親様ののみ法を伝える外はないのであります。本を尋ねれば全く如来様のお他力の外はありません。これに例してお考へになれば何事もお分りでありませぬ。三つに忌日命日を御縁に御法義を喜ばせて貰って、信を得た人は益々御恩を喜び、得られない人は、益々調熟の度を増させて頂くという考へて、法事を営むことが肝要ではありませぬかとありますが、このお尋ねの中、調熟の度を増すとありますことは、真宗では既に他力を聴聞する身になった上は、因縁を造るといふ様なまどろしい考へを持ってはなりません。聞かせて貰う度ごとに、今度こそは信心を得させ頂かねばならぬと、心得て聴聞をせねばなりません。そうなればお尋ねの点は全部よる敷あります。

かように仏恩報謝の思いになって、ご読経をさせて頂けば、如来様はそれを受取って有縁の衆生へ、あなたの方で与えて下さるから、先立ってた者が大変な御利益を蒙るのであります。それでこそ年回法要しても非常に有意義なことになりますのであります。自分の善根を直に振向ける追善供養の心得とは、大変に事柄がちがいますから、まぎれぬようにせねばなりません。

## 18 たのみにする

【問】 昨年の末頃より父親から御法話のある時は、お寺にお参りするようにと勧められましても、仏様のお話は聞きたくございませぬでした、最近後生の事が気になり出しまして、時々夜休んで居て、若し今自分のような何も分らん者が死んだらと、それから先の事を考えますと恐ろしくて、じっとして居られぬような事がございます。何んなにしたら信じられるようになるかしらと、苦しんで居ります、どうか御教示願います。

【答】 御法義に就ては、先ず仏法の正しく尊い事を心得させて貰う事が大切であります。釈迦如来様の御化導は、何れの点から戴いても道理に契うた偽りのないみ教であります。

善因善果悪因悪果の原則から戴いたら、願行のない罪造りの凡夫では到底後生の助かる目途はありませぬ。然るに阿弥陀様の御本願はこの機目的の御慈悲で、如何なる罪惡の深き者もよくよく御承知の上で、助け御約束を御成就なされたのでありますから、後生大事と思うたら、現在の親を頼る思いの如く大悲の親様の御本願におすがりさせて戴くのであります。御和讃の中には、「子の母をおもふがごとくにて、衆生仏を憶すれば、現前当来とほからず、如来を拝見うたがはず」と仰せられ、御文章には、人間の臨終に立到りた時の心持ちをお示しなされて、「まことに死せん時は、かねてたのみおきつる妻子も財宝も、我身には一つも相添うことあるべからず、されば死出の山路の末、三途の大河をば唯一人こそ行きなんぞれ、これによりてただ深く願うべきは後生なり、また頼むべきは弥陀如来なり、信心決定して参るべきは安養の浄土なり」と

思うべきなり」と御教化なされてあります。

頼むとは、どうぞと願うのではなく、たのみにする事でありませぬ。換言すればおすがりすることでありませぬ。後生の大事は親様におすがりする外はありませぬ。御本願が大丈夫でありますから、あなた様を頼りにし、おすがりさせ、貫うことが、御当流の御安心であります。深い謂れは仏様のお仕事であります、私の貫い心にこれ以外の事があると考へては安心は出来ませぬ、尊い事も深い道理も皆悉く如来様のお仕事でありますから、私としては唯々あなた様の大願業力に、おすがりさせて貫うことが御安心の肝要であります。このお謂れをよくお心得になって、此度迷いを離れて結構なるお悟りの世界に参らせて戴きましょ。

## 19 自力疑心と自我

【問】 眞実阿弥陀仏の御勅命が聞こえて見れば、一切が弥陀一仏の用きで、撰取の光りの中に撰められた上は、自我という観念は失せなければならぬ様に思います。けれどもそこには矢張り、自我なるものがあるが、邪魔になるようになりませぬ。邪魔になるようなといえ、はからい心でも起しているのではないか、しかし別に計っているとは思いません。

今一つ眞如法性の体からいえば、迷と悟りは二つあるのではない、と聞きますが如何でしょうかお尋ねします。

【答】 お尋ねが二つあります、先ず第一に眞宗の御安心は、阿弥陀様のお勅命が聞こえて、願力に信順させて頂いた上は、一切すべて弥陀一仏の御はたらきでただただ親様に撰取せられるばかりとなるのであります。然るに自分の手元に自我というものが失せぬように思われると申されありますが、元来自我なるものは、すべて凡夫の迷いの根本となるもので、これは信心が得られても、お浄土に参るまでは無くならぬものであります。然しながらこれは凡夫の煩惱の迷情の上にある事で、御本願を疑い往生に就て自分の計らいを雑える分と事柄が違うのであります。

往生に就ては親様の願力に打まかせて、自力の計らいを打すてさせて頂き、唯一すじに親様のお助けにまるまかせさせて頂くのが眞宗の御安心であります、ここさえ戴けたら往生には間違いありません。

次のお尋ねの私らは、眞如法性の体からいえば迷いと悟りと二つあるので無いというお尋ね、これは申す迄もないその通りであります。然し物にたとえていえば、ここに東から西に通ずる道があります。この道はたしかに無いのではありません。然し乍ら西を西と心得て西に向って進んで行けば其道もたしかに正しき道に相違ありません、その思いも迷いではありません。然しながら西を東と誤って進んで行くとすれば道も間違って居ります、思いも迷っているのであります。丁度その様に我々も眞如法性の理の外ではありませぬが、併し乍らこの理に迷い、誤った考えを起している間は、すべてが皆迷いでありませぬ。

私らは実に自分でないものを自分と思ひ、我物でない物を我物と心得

ておりますから、これが迷いの衆生の状態なのであります。無始己来尽  
未来際の末にかけて、迷いに沈める間は、誰人も皆ここに迷うて居るので  
あります。現在人間である限り人間の自我の迷より人間界のあらゆる物  
を、実に自分と思い、実に我物と想うて居るから、いつまでも執着の心  
はとれませぬ。然し乍らこれが即ち迷いであるから我物と想うて居って  
も、生が変ればすべてこれを捨てねばなりません。之をすてて見れば何  
物もないかと云えば、やはりこの迷執が連続しませぬから、自分に非ざる  
ものを自分と執じ、何時がいつまでも斯様な迷いをくり返すのでありま  
す。この迷いの思想を離れ、この迷いの行動がなくなつた時、始めてお  
悟りの世界に出させ頂くのであります。要するにわが往生の一大事に  
就ての肝要は、自力をすて、御本願に全まかせをさせ頂くことがいよ  
いよの要点でありますから、その辺をよく御注意を願っておきます。

## 20 魔界と外道

【問】 念仏の行者には魔界外道も障碍することとなりしとあります、外道  
とは総て仏教以外の余道を指したるものと考へて居りますが、この魔界  
なるものは、どんな世界を名づけたもので御座いますか、

魔王といったら、妖怪か、悪鬼神か、何れにしても、其怒りに触るる  
と、忽ち障るとか、崇るとか、大いに人類に向つて迫害を加える、一種  
の生物が現存するものですか、同じ人界に於ても純真なる人類を誘悪す  
る醜輩を指したるものでしょうか、

事実この世界は尽十方無碍光如来でありまして、十方世界仏智の遍満  
せざるどころなく、大慈悲の行き渡らない所は無いのでありますから何  
れの辺にも悪魔や悪鬼神の跳梁する筈もなく、崇るとか障るとか、申す  
言さえ認むることの出来ないハッキリとした世界でしょう、だからそれ  
をそんなに恐れる観念は根底より間違つて居ると思ひます。然るに魔界  
の障碍という語がありますので、この辺から考へますと、これは、念仏  
者は全くその障碍は受けますまいが、其反面に於て非念仏者は其障碍を  
受くるものと思ひますが如何でしょう。

【答】 先ず魔界外道に障害せらる、ということについてお答えいたし  
ます。魔界ということばは、天魔、悪魔ということがありま  
して、例せば第六天の魔王が、人間に向つて、障害を与えるということが  
あります。その眷族が多くありまして、また障害をするということもあ  
ります、これを魔界というのであります。

人界に於て純真なる人類を誘悪する醜輩の如きは、即ち外道というので  
あります。外道といへば仏教外の総ての教を指すようにありますが、  
仏教外の教でも、仏教の正しき道理に契う教えなれば、即ち仏教と同  
様で、外道とはいわれぬことになりませぬ。例せば孔子や孟子の教のよ  
うに、正しい人道を教える如きはそれでありませぬ、今外道というは即ち  
邪教のことで、道理に契わず、道に背く教を指して外道というのであ

ります。

次に十方無碍光如来とあって阿弥陀様の光明は十方世界に遍満せぬところが無いとすれば、悪魔、悪鬼神の跳梁する筈なく、たたとるか障るとかいうことは認むることは出来ないとありますが、十方無碍光という事については、如来様の光明には照育の光明と、撰取の光明と二つの作用かあります。照育の光明でいえば、十方衆生が仏教を聴聞する様に、お育ての作用であります。これは利益を蒙むることの厚薄はあります。が、十方衆生如何なるものも漏れる者はありません、去り乍ら現在罪惡を造る善根なき者は、迷界を離れることも出来ず地獄にも落ちます。それと同じように悪魔の障害も受けねばならぬ道理であります。

信心を頂けば如来様の撰取の光明に抱かれて、信心の徳として、あらゆる煩惱惡業を断滅せらるるとき、地獄にも落ちず、又天魔悪魔にも障害せられぬこととなるのであります、尤もここに注意いたしますが、信心を戴いてもこの世にある間は、煩惱も起り罪惡も造ります、今信の一念にすべての煩惱と罪惡とを消滅して下さるといふことは、信心のお徳からいふことで、信心のお徳からいけば、全く煩惱惡業は信の一念に消滅するのであります。それが事相とって相の上になくなることは臨終の時にして、この時すべての迷を離れて、浄土に往生をさせて頂くのであります。

要するに悪魔の障害などのことをいうから方角を選んだり、友引きとかいう迷信が起るのではないかと思ひます。これは天魔、悪魔の障害のあるといふことは、争われぬことではありますが、これを防ぐ方法を誤るのであります。これが即ち迷信といふものであります。依て近くこれを説明すれば、能く人道を守り正しき行いをすれば、それだけでも天魔悪魔の近寄らざる徳はあるのであります。況んや信心の得られた人は、御和讃にも「大地にみてる悪鬼神皆ことごとく恐るなり」とある通りであります、か様な道理でありますから、速かに信心獲得の身となられ、報謝の称名ともろとも、人道を誤まらず、俗諦の行儀を正しくお守りなさることが、何よりも肝要であります。

## 21 信者と悪業

【問】 甚だ恐縮ですが私の不審に對して御明答を願ひます。ある殺人罪を犯したものの例せば山田憲の如き、惨酷な殺人罪を犯したものが大いに改悔し、戒師により他力本願の教法を聴聞して信心獲得の身となられた。今一人不良な人が他家に押し入り強盗をはたらき、刑に処せられた、其後満期放免となり不思議に法を聞くようになりました。今思うとこの人の育った家は御法義の家庭でありました。

ここに起る不審はこの兩者を見るに一人は去人となっているが、全く改悔、さんげして無二の信者となっていたから極樂往生疑いないと信じます。

今一人は犯罪前より軽いが時々悪いくせがある、如来の御慈悲は如何

なる罪深きものでもお助け下さるとは申しながら、かかる不良の心では如何なるものでありましょうか、御明示願います□

【答】 右様のおたずねはよく世間にあることではありますが、真宗にとつては非常に大切な問題であります。これは真諦俗諦という法義をよく注意して考えねばなりません。真諦門からいえば、往生は仏の願力により、未来浄土に往生せしめたもうことなれば、御文章にあるように十悪五逆の罪人もことごとく消滅したもう故に、如何なる罪業ありとも往生間違い無しということでもあります。去り乍ら法はそうでありましても、信があれば自然に俗諦門の生活にも及んで来るわけです。念仏者の生活からいえば、罪障は誠められ、今生生活の間は、この身体は前生の業果なれば前生の業も報います。今生で造った罪も華報といって今生で華の報いを受けねばならぬ。例せば世間の法律に問われるようなものであります。「但し信心の人なれば現益がありますから一概にはいわれません」が、因果の道理というものは、前世で人を殺せば今生。後生で大な報いを受けねばなりません。今生で人を殺せばたと前生の敵をうつにして、その罪悪は今生後生で必ず報いを受けます。されば信心を得た人はたとい仏力によって、罪障を滅せらる、といえども、其辺の道理を考えたら大いに懺悔して人の迷惑にならぬよう、心得ねばなりません。

## 22 称名報恩

【問】 おたずねいたします、信じた上の称名念仏は、仏の御化益をお手伝いすることになるから報謝になることですが、ただお手伝いということならば余り重要でないように思われます。私は小児は母の名を慕い呼ぶ如く、信者は仏のみ名を南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と呼ぶ、それが仏を喜ばせるから報謝になるのではないかと思われませんが、如何のものでしょうか。

【答】 信の上の称名が仏恩報謝になるということは、上は仏徳を讃嘆し下は仏化を助成することになるから、仏恩報謝になるのであります。上仏徳を讃嘆することは子供が母の名をよぶごとく心得てよろしゅうあります。

下仏化を助成するということは、我々が称えるお念仏は懈怠勝ちなれども、和讃にも「無慚無愧のこの身にて、まことのこころはなけれども、弥陀の廻向の御名なれば、功德は十方にみちたまう」とあれば、仏名の徳が尊いから大いに仏の御利益をお助けすることになります。併しなすがら我々の心得は仏恩を感謝する思いにて称名すれば、宜敷御座います。如何に仏名の徳が十方に満ちわたるとはいえども、やはり仏力の外はないのでありますから、ただ私らにとりては仏恩の廣大なることを仰いで感謝する外はありません。

## 23 信一念の覚知

【問】 口伝抄六十八丁に「一念をもって往生治定の時刻ときだめていのち延ぶれば自然と多念に及ぶ道理をあかせり」と仰せられ、また執持抄に善知識のことばの下に、帰命の一念を發得せばと仰せられてあります。その他一念のことはいくらかも聖教に出ておりますが、この時刻の一念は何月何日何時に、どなたの御教化の下に獲信したという一念の時尅が自分にわかるもので御座いまいしょうか、わからぬもので御座いまいしょうか。

【答】 信心獲得の一念の時尅は、必ず何人にもあるもので御座います、しかし、その一念の時尅を自ら何月何日何時であったということは、分る人もあり分らぬ人もあります。御開山様や弁円は明らかにその時尅が分った人であり、今日でも、この時尅の分る人もあります。さり乍ら煩惱強盛の凡夫なれば、煩惱のため取り紛れ、あるいは若存若亡で信心が出来たり砕けたりするうち、いつとなく真実信心になる人もあります。そこで大体に於て自ら獲信したことか分らぬということではありませぬが、大概を人は精細な時尅が分らぬ方が多くあります、だから信明院様の御消息にも年月日時を沙汰すべからずと仰せられてあります、時尅に心を取られず、唯願力不思議を聞き分けさせて頂くことか肝要であります。

## 24 善悪共に

【問】 阿弥陀様のお慈悲は、私らの所作の善悪によってお助け下さるのではない、真実の大慈悲で如来さまがお助け下さるので、悪人の生れつきのこのままが、お助けにあずかるのであると聞かせてもらいますと、まことに有難いようで御座いますが、事実私の所作や、心の状態を眺めますと、何うも御法義を喜んでいられる心も姿も御座いませぬ、悪人のままと聞かせて貰えは、いかにもこのままが救われるようでもあります、これを私の現実の上に味いますと、どうもこのままでお救いとは思われませぬ、何だか「悪人のこのままでお救い」という御教化をもって来て、自分の心をごまかして居るような心地が致します、この辺は如何心得たらよろしゅうございまいしょうか、お聞かせを願います。

【答】 ここがまことに大切な処で御座います。これは浄土真宗の真諦門の味いと、俗諦門の味いとを、これも理窟でなく、実地に味わわして貰わねばなりません。弥陀の本願の前には罪の沙汰は無用なりであります。わが身か善い悪いという、そんな事は、御本願の前には用事は無いのであります、往生の一大事については、御安心のお心持は、如何なる

罪人もお助けに間違いない事と、これも実地に味わうべきであります。このままお助けに預るということを簡単にいへば、元来この宇宙は、すべて仏教の真理として定められました真如法性の顕われで御座いますから、これは暫らく有漏と無漏と、凡心と仏智とこう分れては居りませんが、其体から申しますと、丁度これは氷と水の関係で御応いまして無明の寒気のために法性の水が疑結しましたのが、有漏の迷界ということになります、そうして此の真理をお悟りになったのが如来さまであります故、凡夫の力ではかかないませぬが、仏様のお力では、この有漏の凡心と、無漏の仏智とが融合する作用があるのであります。この意義に於きまして、弥陀回向の信心を獲得すれば、仏心と凡心と一体になり、有漏の凡心が全く無漏の功德に融じ取られるから、真諦門からいけば煩悩のままにお助けに頂るのであります。さてこれが今日の日暮し、俗諦門の方にまわりますと如来様御冥見のもとに謝り入り我身の行いをよくするように、実地にかけて者まねばなりません。

## 25 宿善と獲信

【問】 私は世の多くの同行達が求めている頼む味に行結って苦しんで居ります、ある御講師のお説教では、「信心のいつまでも頂けないのは、未だ宿縁か来ていないのだ」と仰しやいました、また、ある御講師は「疑いを晴れさせて頂くのも凡夫の力ではなくして、如来様が晴れさして下さるのだ」と申されました。私は、これまで疑は自分の力で晴れるものと思って居りました。では宿縁がなければ何時まで苦しんでも、信心は頂けないのでしょうか、私は如来様から疑を晴れさせて下さるまで待つて居られない気が致しますが、如何なもので御座いましょうかお質ねいたします。

【答】 お質ねのたのむの味とは、如来様のお助けを頼みにすることです。仏の願力がお手強いから、私はこの願力を頼みにしておすがり申すことでもあります、よって凡夫自身は後生となっては、罪は深く願も無く行も無く、天にも地にも法海にすがり場の無いものであります。阿弥陀様がこの機を助けるために願行を成就して、罪ありながらこの弥陀が助くるぞよとお呼び下さる。このお慈悲を頼みにさせて頂くのが、弥陀をたのむ領解のすがたであります。そこで信心のことは如来様から疑いを晴れさせて下さるのであります。宿善のことはもとよりあることではありますが、苟しくも大事に法を求めめる者は宿善が無いとはいわれません。よってこの如来様のお慈悲のおまことをよく聞きわけさせて頂けば、わが力で無くて仏のお手元が大丈夫だから安心させて頂かれるのであります。ただいたずらに侍っているのではありません。大事をかけて法の方をよくよく聞かせて戴かねばなりません。

## 26 求道の心

【問】 私は年来死ということが非常に恐くて、それ故つねに御法を聞かせて頂きます。然るに私の心は二道に別れます。一つは死は恐く、又一つはそれに驚かぬ心です。静かに後生を思う時、なぜ本気になって一大事を求めてくれないのかと我機なからも悲しくなることさえあります。私が、私としてこれをどうすることも出来ませんが、この心はどうしたら驚きを立て本気になって法を求めようになるのでしょうか、お示しを願います。

【答】 無常の世と知りながら、飛び立つほどに驚きの立たぬのは、愚かな凡夫の習いでありませぬ。とても我々は、西行法師や、伝教大師や弘法大師のような法の求め方は出来ませぬ。

由ってただ凡夫相応に、後生大事の心が起ればよろしいのであります。そこに力みを入れるかわりに、御法のわが身に相応したる尊とさのほどを聞き分けさして頂くことが肝要であります。しかし、蓮如様もくどくどと、無常の有様をお知らせになって「一大事というはこれなり、もつての外の大事なり」とも仰せられてあり、又、先徳の言葉にも、「無常」の二字を鼻の先きにかけておけ」といわれたご意見もあり、また、念死聞法ということばもあります。時には臨終をとりよせて大事をかけて御聴聞なされねばなりませぬ。

## 27 聖教は仏の直説

【問】 私は善知識の御説法は偽りとは思いません、又諸の経文の御説も虚とは思いません。それに、阿弥陀様の御本願がハッキリ信ぜられませぬ。そこで、朝晩お内仏さまにお礼をして、南無阿弥陀仏を称えていてもフト「夢の中にでも仏様かあらわれて下さったら、ハッキリと、信ぜられるだろう」又ある時は、「真宗のみ教えは、還相廻向なれば親鸞聖人や、蓮如上人のような方が幾人も御出世になれば」など思うことも時々ありますが心の迷いというものでしょうか、御批判を願います。

【答】 お質ねの事は一応尤に聞こえますが、お聖教の御化導で信心が獲られぬとすれば、蓮如様や、御開山様にお逢いしても獲信の出来る道理はありません。殊に夢などで如来様を拝んだとて、夢などは的にならぬものでありますから、信ぜられるものではありません。それよりは、先にいわれたお聖教のお説は虚とは思わぬと申された、あれが大切であります。先徳も聖教は如来のおことば句面の如く味えと云うておられる、先年も或る大学生か死病にかかり臨終も近いとの事、御法話を願いたいと云うて来たので病院の病室へ行ったことがあります。病人の枕もとで末代無智の御文章を読んで聞かせて上げた、「たとひ罪業は深重なりと



も、かならず救いませしべし」と読むうち、あれをもう一度読んで下されというので、操りかえし読むうち「ああ、有難い」と云ったま、声は聞えぬようになって了った。このお味いでお聖教を拝見なされたならば、お助けは疑われぬではありませんか。聖教は仏の直説と頂くのであります。

## 28 前世の決定業

【問】 如来様のお慈悲を信じた者は、この世でなしたる悪業が、後生で悪果を受けないで済ませて頂くとお聞かせに預って居ります。さすれば、信決定の人がこの世で大病にかかっている場合に、如来様はこの苦しみを除けて下さることは出来ないのでしょうか、この世でなした悪い業因が未来で果を開かぬなら、過去世になした業因が、この世で大病という果となつて、苦しむ、その大病の悪果を除くことは、如来様として出来ると思ひます。それが出来ぬなら、仏様のお力も無限といわれぬ事になります如何でしょうか。

【答】 お尋ねは一応尤もに聞えますが、これは現在の我身はどうして出来たという事を考えさせて貰わねばなりません。現在の私らの肉体は、過去世に造った色々な善いこと悪いこと、其前生の業に報うて出たのが、この現在のわが肉体であります。だから此肉体の続くかぎり、前生からの定まった業報は、例せば女は男になれぬ如く、のがれることの出来ぬのがきまりであります。由って今如来様のお慈悲を戴いて浄土往生と定まっても、信の一念三世の業障が消えるというのは、信徳と云つて信心のお徳からいふのであつて、現在の定業からいへば、前生から受けた業はまだこうして肉体が続いている局り、やはり前世の報いを受けて病氣にもかかり、貧苦にも泣かねばならぬ、これが又正しい現実の因果であります。

さて、そうなら今生に於て何も仏様の御利益、御加護が無いかといへば、中々そうではありませぬ。御信心をいただいで、念仏喜ぶ身となつた人は、如来様がつき添うて夜昼常に護つて下さっているのであります。こちらには油断はあつても、あなた方には御油断は無いのであります。それで過去世の業報でも、それには色々種類がありまして、決定業、不定業、已熟業、未熟業など、分れそれにもまた軽と重とがありますから、これらを彼此分別して、その力の弱いものは之を、私として気付かぬこともあるがあなた方のお力で消滅して、受けずに済ませて戴くとか、又、受けるにしてもずっと軽くして受けさせて頂くとか、そういうことはまことに数限りなく私の今日の上にある事なのであります。

こうして出来るだけは現世から御守護にあずかつて日送りさせて頂いていますが、いよいよあらゆる罪惡の業障が悉く消えて、お証りを開くことは、この前世の業感を受けた肉体を捨てて浄土へ往生させて頂いた時であります。それで私共は、明けても暮れても如来様のお光明

の中の日暮しをさせて頂いている事を喜びながら、やがて近く安養浄刹の楽みを待たせて頂くのであります。

## 29 無生の生とは

【問】 高僧和讃の曇鸞章に「如来清浄本願の、無生の生なりければ、本則三々の品なれど一二もかわることぞなき」とございます、あの中は無生の生というのは、どういうことで御座いましょうか、お示しを願います。

【答】 無生の生と申しますことは、如来様のお証りの上でいうことでありまして、「無生無滅の真理にかのうた生」という事でありまして。私等凡夫の境界でありますと、これは、一人々々が生滅に縛られているのであります。生きていますものは、必ず死なねばなりません、子が生れたという事は芽出度いがもう、そこには死ぬるという約束が出来上がっていますから、いつかは泣かねばならぬことが、生れた時から約束されているのであります。

こうぬきさしならぬ規則に縛られて日暮しているのが私らの相であります。然るに御本願のお慈悲におまかせ出来て、お浄土へ参らせて頂けば、ここへ生まれたままだが、生即無生の道理に契うので生まれたままだが、私ら人間の生れかたの様なのと全然違った生れかたであります、それはもう死ぬるという事の無い生れかたであります。

無生の生とはお浄土に往生したままだが、一味平等の証を開くという事になるのであります。そこで「本則三三の品なれど、一二も変ることぞなき」ということは本は即ち三々の本—これは凡夫に上の凡夫、中の凡夫、下の凡夫とありまして、その上、中、下にまた上の上、上の中、上の下、中の上、中の中、中の下、下の上、下の中、下の下とありますから三々が九品の等差のある凡夫であります、このようにこの世に居ります間は、色々品はかわるが、善根の多く出来るお方も、悪ばかりに日送りする私らのようなものも、お浄土に参らせて戴いた上は、無生の生という生れ方であり、一味平等の証りを得させて戴くという仕合せに会うのでありますから、この世で善い行いをした人も一味の証り、この世で悪い事ばかりした者も一味の証り、皆平等の仏の証りを得させて戴くのであります。

これが「本則三々の品」じゃが、証りの身となった上は、誰も彼も一二もかわる事の無い身にさせて頂くというお意であります。

## 30 真谛と世俗

【問】 真俗二諦は、信一念の時からいわれるという人がありましたが、

如何でしょう、俗諦は信者の生活上のたしなみであるから、別の物であるとも聞きます、二種深信も真俗二諦も一念同時に揃うものでございませぬか、お示し下さい。

【答】 真諦と俗諦とは、離れざるものであります。しかし一つものではありません。二種の深信は真諦門の安心で、機の深信とは、自力のすてはてられた相であります。法の深信とは、願力のお救いにお任せした思いであります。つづまり我が身は地獄必定のいたずらものと知らされ、自力の思いをうちすてて、願力のお助けにおすがりさせて貰う思いが二種深信の相であります。よってここには俗諦の意義はありませぬ。この信決定の後の生活上のたしなみの上に、わが身の行状をつつしませていただくが俗諦であります。然し、この俗諦も真諦からもようされるのでありますから、元より真諦を離れたものではありませんが、真諦の二種深信が、直ちに俗諦ということではありませぬ、この心で御判断なさったら、お訊ねの趣きの二つの説のよしあしは御了解できるであります。

## 31 信行は不二

【問】 信と行とは二つであって、これは丁度火と煙のようなものであるとお聴かせにあずかっていましたが、この頃ある僧から承わりましたら、信と行とは二つでない一つであるように聞きました、何れか正しいのでしょうかお尋ねします。

【答】 お尋ねの信と行とは、信とは信心の事であり行とは称名の事であります。それなればこの信と行とは、一つとも云われるのであります。又、二つとも云われるのであります。まず、一つと云われますのは、一声、二声と称える称名は、信心が姿にあらたれた相でありますから、其辺からいえば、これは一つのものであるといわれるのであります。さりながら、信心は心にあって、往生の正因であります、称名は口にあわられて、仏恩報謝となるのでありますから、その辺からは火と煙のようなものでありますから、其辺からは二つに見ねばなりません。一つに扱うことは、これは大変むつかしい法門でありますから、普通では、信と行とは一つのもので、信心は往生の正因、称名は仏恩報謝の経営なれば、火と煙の如く心得たらよろしいのであります。

## 32 必ず遇える

【問】 私は因縁悪くして、早くから夫に死に別れ、また間もなく、可愛い子供に先立たれました。その後私は信仰に悩んでいるのです、いろ

いろ御教化に預りますが、仏様の願力不思議を以て、極樂に往生させて頂けば、神通力を以て先立たれた夫や子供を皆済度する事が出来るとの事でもあります。然し又他のお方のお話しによれば、三悪道に沈んで苦しんでいる者は、因縁無くしては、それを済度することは必ず出来るとはいわれないとの事でもあります。私のように、夫や子供に先立たれて、早くそれを済度したいと思っているものは、何う心得たらよろしゅうございましょうか、直ぐ、私が極樂へ参ったら済度出来るものでありましょいうか、必ずしも出来るとは限らぬものでありましょいうか、お聞かせを願います。

**【答】** お浄土に往生させて頂きますれば、必ず還相回向の御利益があるのであります。この還相回向の利益は、もとより一切衆生に及ぶのであります。特に自分に因縁のあるものを済度させて頂くことか主になるのであります。由って、今生のみならず、生々世々の親兄弟を済度させて貰うことが出来るのであります。由ってあなたも、お浄土に往生させて貰われましたら、必ず第一番に、夫やわが子の済度が出来るのであります。これこそ因縁があるので、因縁がないとはいわれませぬ。

### 33 心が往く

**【問】** 極樂は西方十万億土と承りますが、人間の世界とは、全然別のもので御座いますか、人間のこの世界をば、犬は犬の世界と思ひ、馬は馬の世界と思うように、やはりこの世界が仏のお世界となるのでありましょいうか、全然、この世界よりほかに、遠いところに極樂という世界があるとすれば、何うして、死んだ時に魂はその世界へ行くので御座いましょいうか、弘誓の船とは申されますが、この船とは喩であって、實際、船にのりこんで行くのでありますまいから、それなら、どうして行くので御座いましょいうか、それから今度は地獄ですが、この地獄もまた、この地の底、何百由旬とやらにあると承りますが、大地の底に實際あるので御座いましょいうか、もし大地の底にありとすれば、これまた魂はどうしてそこへ行くのでありましょいうか、徹底的に御説明をお願いします。

**【答】** お尋ねの如く、極樂は十万億土の仏土を過ぎて世界あり、名づけて極樂というところありますから、この世界とは全く別の世界であります。此の世界を、犬は犬の世界と見、馬は馬の世界と見る。これと同時に、仏は仏の世界と見るという道理も、無い事はありません。しかし、これは各々自分の業力や、またはおさとり智慧の上から、左様に見るまでのもので實際は、ここは迷いの世界で、極樂世界ではありません。極樂世界は、如来様の大願業力から出来た世界で、人間や畜生は、とても眺める事は出来ぬ世界で、大菩薩でも見られぬ世界であります。

この世界へまいらせて頂きますのは、この肉体ではありません、この心がまいらせて頂くのであります。肉体なれば時間もかかり、多くの里

程も経ねばならぬ、然し、此心が行くには里程も無く、また時間も無く、お経には屈伸臂きよう即生極楽とありますから、かがんだ指がのらぬ間に往生させて頂くのであります。

又、地獄は何処にあるかという問題であります。すべて世界というもの、人々の業力であられるのでありますから、我々は各自の業力で顕われるのでありますから、我々は吾が業力で、一つの地球界に住んでおられるのであります。地獄はまた地獄の罪人の業力で出来ている世界でありますから、その世界はこの地球外に、別に幾千万里落ちゆくところにあるのであります。そこへ行きますには、これも肉体なれば、土をもぐりてとか、穴をくぐって行くという事にもなりましようが、肉体が行くのでなくて、心の往来でありますから、物質とは関係がない事になるのであります。

## 34 千中無一

**【問】** 現世利益和讃に、「南無阿弥陀仏をとなふれば、梵王帝釈帰敬す、諸天善神ことごとく、よるひるつねにまもるなり」とございます。この御和讃をいただきますと、南無阿弥陀仏をとなえると、この現世に於て多くの御利益があるようであります。かかると念仏故、これをとなえさえすれば、たとひ信心はなくても化土の往生が出来る。それで、とにかく称えよと申されます。これについてお示しを願います。

**【答】** お訊ねが、現世の利益と未来の益と、二つに分れて居ります。先ず現世の方からお答えいたします。

御和讃に、「仏号むねと修すれども、現世をいのる行者をば、これも雑修と名づけてぞ、千中無一ときらわらる」とございます。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀と称える、そのとなえた念仏の力で今生のわが身の利益を祈る。

これは御開山が一番にお嫌いのことであります。千人の中で一人もお浄土へまいれるものは無いといわれるのが、この御和讃のお意であります。だから真宗のお念仏を称える心もち、どこまでも仏恩報謝の心からでなくてはなりません。守ってもらおうとしてとなえるべきではありません。

この世界の事は病気になるればお医者にかかり。貧乏すれば働いて取りもどし、正しい因果の道理に従って行く事を教うたのが仏教であります。それに病気や貧乏を如来様へもって行って祈るのは、因果の理に背くから迷信になります。だから後生の一大事は如来様にまかせ、救われた喜びが御礼報謝として、南無阿弥陀仏と称えさせてもらう、この信心の行者は、この世の五十年百年を、阿弥陀仏はもとより、十方恒沙の諸仏、諸天善神ことごとく夜昼つねに守り通しに守って下さるのであります。これがあなたのお尋ねの中にある、現世利益和讃のおこころであります。

又、一面にはこういう辺も、御恩ありがたやと、無我に

お念仏を喜ぶ、あの信の行者のお念仏の声をきく事を、諸神詣仏は、われわれが春の野に出で、鶯の声を聴くように喜びであります。ありがたやと、信の上から称える無我のお念仏の声に、我も我もと諸神諸仏が、その行者のまわりに集って来て下さる。この諸神諸仏のより集って下さることが、自ら私らをお守り下さることになるのであります。そこで私共としては、現世を祈る心などを持たず、ただ如来様の御恩を喜んで、お念仏の日送りの外はありません。そのものの上に、あなたの方から現世の御利益も自ら、お与え下さるのであります。

現世に向っての私としての心得は、ただまじめにはたらく、そしてその上に免れぬ不仕合せは、これは前生の約束とあきらめる、この外にないのであります。

次に未来の益であります。信心はたとえ無くとも、南無阿弥陀仏を一生懸命となえさえすれば、化土へ往生出来ましようかのお訊ねであります。これはなかなかわれわれが今日の日暮しをしつつ念仏を称えたりかると云って、それで化土へ往生するなどは思いも及ばぬことであり善人となって平生は、一生懸命お念仏をとなえ、その称える念仏が、直ぐ往生の因ときまるのではありません、それは臨終に称える念仏の稽古までであります。さて臨終になりますと、心を正念にたもち、念仏をとなえ静かに来迎仏のおむかいを待ちます、そうしていよいよ来迎仏を受けて、それで往生がきまるのであります。

わが浄土真宗はこういう事をするのではありませぬ、南無阿弥陀仏の利益が、現世の生活の上にあっても、それは如来さまの方にお任せし、又未来後生もただただ願力一つにおまかせし、私としてはただ御礼御報謝のお念仏を喜ばせていただくばかり、これが浄土真宗の御教化であります。

## 35 信心と歡喜

【問】 信心は体で歡喜は信心の相であります。そうすれば信心と歡喜とは同一不二のものであって、信心のある処必ず歡喜が伴わねばならぬものかと思えます。所が私は、信心はありますが、歡喜がありません、これはいかがでありますでしょうか、ある人は歡喜は感情であって、感情で往生出来ぬから、歡喜はなくてもよいと言われます。この辺について御教示をお願い申します。

【答】 信心がお浄土へまいる因であります、極樂へまいるには信心—如来様のお慈悲の疑われぬ事になった一つであります。次に、歡喜であります。この歡喜に二つございます。初起の歡喜と相續の歡喜とであります。初起の歡喜と申しますのは、お了解の当体にあるので、即ち往生に安堵する思いが初起の歡喜であります。安堵は性能のたねではありませぬ、然し、信心のものがらの上には、必ずこの安心安堵のつやがあ

るのであります。これをたとえて申しますと、色のついた餅のようなもので、赤い餅、青い餅、あの色で腹はふとりませぬ。腹のふとるのは餅をたべて太るのでありますが、然し、餅であれば、そこに何かの色があります。その餅は信心、安心安堵は餅の色であります。信心という餅の上には、必ず歡喜という色があるのであります。然し、その色がなくてはまいれぬというのではありませぬ。赤い色がなくては腹が太らぬという事は無いようなものであります。然し、親様のおよび声が聞こえたら、安心すなといわれても、安心せずにはおられませぬ、これは初起の一念の上についての事でありまして、この安堵は感情とはちがうのであります。

次に相続の歡喜であります。これも往生のたねになるのではありませぬ。信心さえあれば、喜んでまいれる、喜ばなくてもまいれます、うれしゅうてもまいれる、うれしゅうのうてもまいれます。然し、この信心の喜びは、それがすぐに如来様に対して、御礼御報謝になるのでありますから、喜ばれなくてもよいと、打ちすて、おかずに、なるべくなるべく取り出して、喜び喜びせねばなりませぬ、御恩を喜ばせてもらいますと、まことに気分もはればれ致します。何となく心ものびろい、人間境界の世渡りまでが、お喜びの中に日暮しすると、何となくのびろいのであります。真宗信者と致しましては、お浄土まいるのたねには何の用事もないのであります。然し御報謝には用事があるのでありますから喜ぶように喜ぶようにせねばなりません。喜びというものは、喜ばずともよいとほっておくと、中々喜べるものではありませぬ。私は応揚懈怠であるとし心がけて、なるべく報謝のお称名をとなえ、喜ばせてもらう事が肝要であります。

## 36 念仏往生の願

【問】 第十八の願を念仏往生の願と申してありますのは、口にお名号を称えよ、往生させると申さるる事でありませぬか、又は御本願の御いわれを聞きて其本願力によって、罪業の私が間違いなくお助けに預ることと信ぜさせていただいたのを、念仏往生と申されるのでありますかお示しを願います。

【答】 先ず第十八願を御開山も、蓮如上人も、念仏往生の願と仰せられてありますが、これは法然上人が第十八願を念仏往生の願と仰せられてあります。御開山や蓮如上人は、常の御教化に信心正因と仰せられるから、如何にも法然上人の御化導とは反対のように聞えますから、信心正因ということは即ち法然上人の念仏往生のことであるぞと知らせんがために、この名目をつかわせられたものであります。

元來法然上人の念仏往生と仰せられたは、称名の数を重ねて、称えた力で往生するという事ではありませぬ、つまり他力往生を知らせんが

為めでありませぬ。即ち法然上人の当時の人が、六度万行の功をつまねば成仏の出来ぬものと心得て聖道の修行にばかりおかかりなされても、何分とも末代なれば、成仏の道が容易に成就し難いことを歎いておいでる人が多しから、その人に対して弥陀の願力のた易いことを知らせん為に、信後の念仏の上で、かかる難行苦行はせずとも、一声なりと十声なりと数に限りはない、称うるばかりで往生とお示しなされたもので、要するに、凡夫の称えた位の力に用のある筈はない、それなれば全く南無阿彌陀仏のお力である、お知らせ下さる為の御化導で、これを誤らず頂いて見れば、我が雑行自力の力でなく、南無阿彌陀仏のお蔭に助けられると頂かねばならぬことになっているのであります。

そこに念仏往生と教えられたことが、即ち信ずるばかりで往生ということになるのであります。よって称えねば往生出来ぬと取った者は、反て法然上人の御化導に背く、信心往生と頂いたものが正しく法然上人の念仏往生の法義を相承することになるのであります。法然上人は常に念仏往生と教えられながら、御門弟の中に信の座と行の座とが別れたことで、能くお別りのことでありましよう。

## 37 一念と多念

【問】 末燈紗の中に、「弥陀の本願と申すは名号を称えん者をば、極楽に迎えんと誓はせ給いたるを、深く信じて称うるがめでたきことにて候なり」とありますが、このお言を私共が見ますと、名号を称うるが往生の因のようになり、次にも「信心ありとも名号を称えざらんは詮なく候」と申されます。信じた丈にては往生の出来ないうにも取れます、此の聖教のお言を私によくわかる様に、お示しを願います。聖人は、信心正因と申されたと聞かせて頂きますのに、どうしてあんなにまぎらわしきお言を御使いなされたものでしょうかお示しを願います。

【答】 御開山が書かれた「末燈紗」のおたずねは、やはり法然上人の御化導と、親鸞聖人の御化導と、同じことであることを知らせん為めに、歎異抄や、末燈抄などにはいつも念仏往生のことが出て居りますが、つまり、正信偈、御和讃、御文章の如く信心正因になるのであります。殊におたずねになった御文は、その当時に、一念義という秘事法門があつて、絶対に一念往生を募って多念の称名の相続をきらった者がありまます。其者に対して、一念の信心定まる上には、自然と多念の称名に及ぶもので、それが邪魔になるように心得るは、大変な誤りであるぞと、お知らせになるお意であります。

由って名号を称えざらんは詮なく候とあつて、その意、相続せぬような信心では、まことの信心でないということをお知らせなされたものであります。そこでたとえ一口の称名はなくとも、真実の信心なれば必ずこの信心が相続して絶えぬものであるということをお知らせなされたものであります。されば又その当時、多念義という秘事法門があつて、



多く称えねば往生出来ぬと主張する異安心がありました。これまた法然上人の御意に背き、浄土真宗の法義に背くわけでありますから、御消息集にも、「京にも一念多念など申す争うことの多く候様にあることさらさら候べからず、ただ詮ずるところは、唯信抄、後世物語、自力他力このおん文どもを能々つねに見て、その御こころにたがへず、おはしますべし」と、仰せられてあります。かように御心得になったれば、何れのお聖教の御文も明瞭に解釈ができることでもあります。

か様な法義上の御不審も、御縁になって結構であります。肝要は蓮如上人の御文章を拝読なされたれば、真宗の御安心は明瞭な訳でありますから、聖人一流の御文から、信心獲得章の御文をくりかえしまきかえし、御拝読なすることが肝要であります。

### 編輯後記

学寮今日までは過ぎたが、今後はどうなるのであろうか。高松和上、面授口決の弟子たちは多くの数になっていたが、現在生き残っている者は、全国集めても僅かなことであろう。だから漸次様相が変ることになる。

かかる懸念もあって、昭和四十九年一月三十一日、学寮世話係総会にて決定されたことは、元来学寮の創立者が高松和上であるから、学寮の全部を和上の寺である、西向寺へ還元するという原則に同意し一決されたことである。これによって和上の孫「西向寺住職」が責任を受け、ひひ孫も成長しつつあり、故に学寮の将来にあんどを得たことである。

学寮の行事は毎年五月一日より五日日中迄の記念講会と、十月一日より1日日中迄の報恩講々会がある。これには会読もあり、御示談もあり、昔から遠近のお同行が参られて、御法義を喜ばれる。又、学寮直接の行事は、午前には諸先生によって学寮の授業、午後は、仏学院の授業があって、正しい御安心の伝承に勤めている。学寮に御因縁を結ばれた人々は、俱会一処の素懐を遂げられますよう念願して欄筆いたします。

山本正念 敬白

### 奥付

1975 1月25日 印刷  
1975 2月 1日 発行

編集兼発行者 山本正念

発行所 広島市南観音町2-13-44  
真宗学寮  
電話 31-2900番

取次所

広島市宇品御幸3丁目6-14  
法雲寺  
電話 51-4869番

印刷者

仁宮孝雄